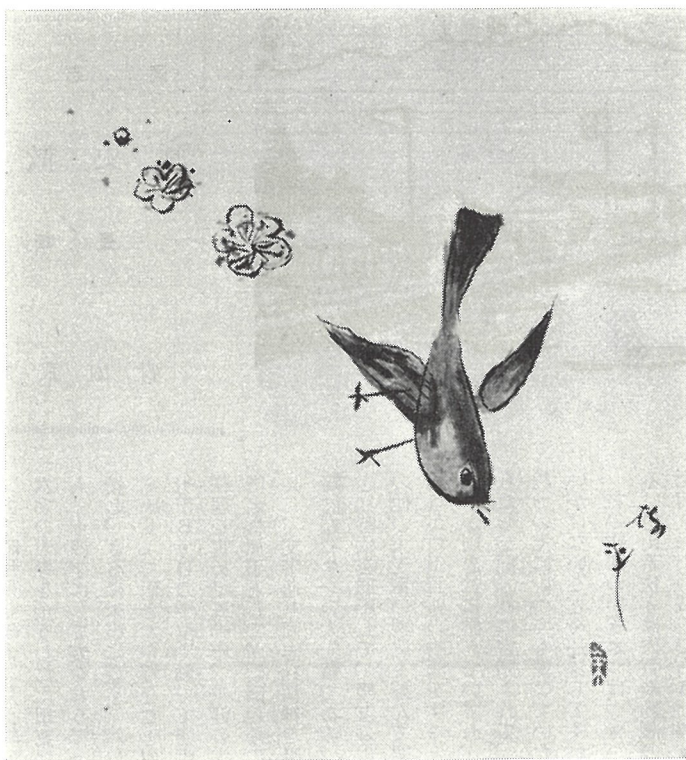




え と 文

要 樹 平

梅に鶯

二月というので梅に鶯をかいで見ました。梅に鶯という昔の安羽子板やへら台などの画をすぐ思い出し、俗なというか随分もつきりしたものですし、また若い人の生活とは凡そ縁遠いものになってしまいました。でも、明治生れの私、植込みのある家に住んで―梅もあります―毎年やって来る鶯を楽しんでいる私、花鳥画を長らく手がけて来た私には捨て難い画材です。

曾て私の篆刻への眼を開いて下さった故近藤尺天先生の梅の詩に

凜々氷清巖壑気 亭々玉立廟堂身
従前誤把瑤姬比 雌了梅花俗了人

というのがあります。この画―鶯が主になつてはいますが―人を俗了するものでなければ幸です。

(在京画家)